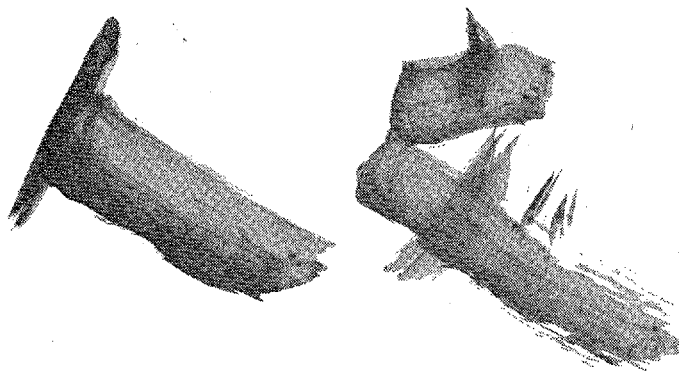
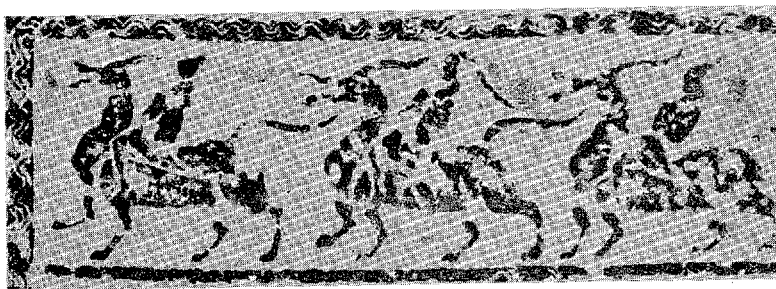


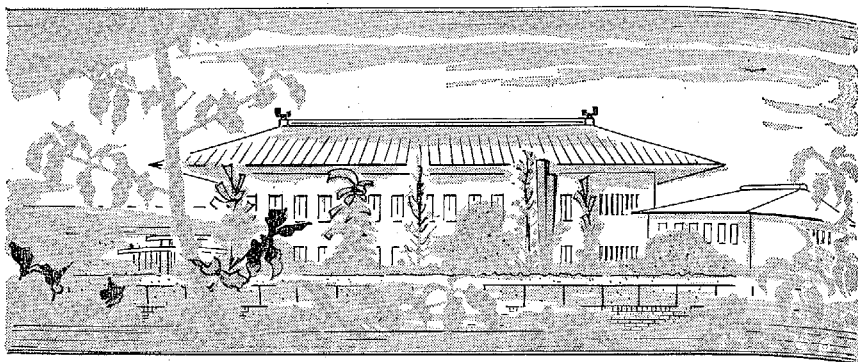


第 六 号



1 9 7 3

京都大学人文科学研究所



人 文 第 六 号 1972年4月 ~ 1972年9月

も く じ

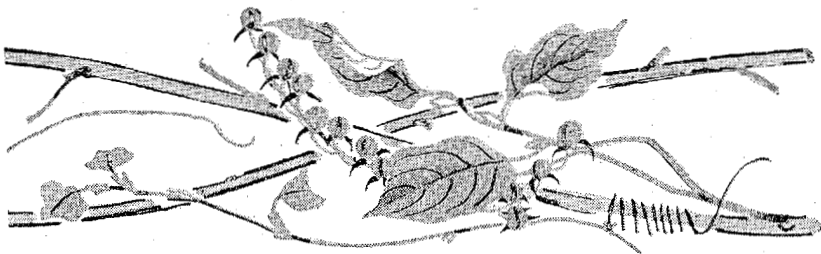
わたしの考え	林屋辰三郎	2
大学観光のすすめ		
講演		
夏期講座		
二〇世紀初期の日本と中国	副島 田照	4
現代の内縁問題	太田 武男	
半植民地中国社会と変革思想	狭間 直樹	
地獄・極楽	牧田 諦亮	
ブルードンの社会思想	阪上 孝	
ルソーの社会観	樋口 謹一	
書評		
林巳奈夫『中国殷周時代の武器』(吉田)／多田道太郎『しぐさの日本文化』(熊倉)／林屋辰三郎・上田正昭・山田宗陸編『日本のへ道』／その源流と展開(三浦)／日比野文夫『年表』(副島)／梅棹忠夫ほか編『探検と冒険』(横山・野村)／上山春平『神々の体系』(島田)／荒井健・興膳宏『文学論集』(竹内)／梅原郁・衣川強『達金元人伝記索引』(藤枝)		11
共同研究のうき		
故大谷勝真氏の敦煌写本調査ノート(上山)／報告書「社会主義運動史論」(仮題)作成をめざして(渡部)イメージと精神(野村)／漢書の研究(川勝)／仏教史学史研究(牧田)		20
研究ノート		
異質と伝統	橋本 敏造	25
思想とイメージ	山下 正男	
顔面ということ	熊倉 功夫	
旅		
仏独瑞伊駆け抜けの記(会田雄次)／ミンヘン大学でのある日のこと(井上清)／ポー・デルタの田舎町(飯沼二郎)／インドネシア便り(日比野文夫)		29
書いたもの一覧(一九七二年四月～九月)		
漢籍担当者講習会(28)・おくりもの(33)・人の動き(10)		34

大学観光のすすめ

林 屋 辰 三 郎

京都は、文化観光都市などと言われる。「観光」という言葉は、文化とはあまりなじまず、むしろレジャーなどと結びつき、俗悪な印象がつよい。とくに観光開発などと称して、自然の破壊につながることも多いので、あまり好ましいものではない。わたくしなども現代のいわゆる「観光」は、きらいである。しかし観光をそのようなものに誰がしたのか、と問い直すと、けっきょく現代の日本人なのであって、もともと観光の原義は決して俗悪なものではなかった。どうやら『易経』観卦に「観国之光」という句のあるのが出典らしい。国光すなわち国家の隆盛なさまを観るということであった。従って一国の文化の精粹を観ることを意味している。観ることによって考えることもできるし、さらに将来の文化発展の指針ともすることができ。国光は自国とともに他国についても云えるし、地方諸国について考えてもよいであろう。従って観光の本義がしっかりと貫かれ見失われないならば、わたくしも決して観光きらいにはならなかったにちがいない。

「観」には観るということと同時に、しめすという意味がある。それは主客相互の關係に置かれた文字である。従って観光には、一国の文化を積極的にしめすことが必要である。しめす方の側に積極性がなく、観る方の一方通

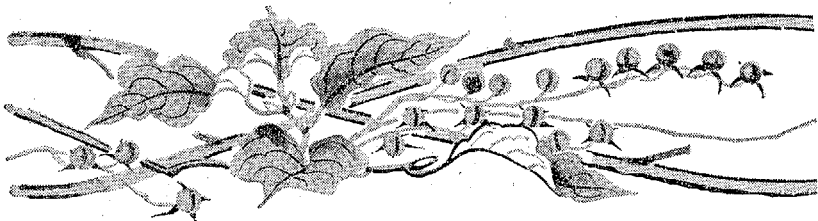


行になると、せっかくの観光も充分に果されないことになる。わたくしは文化の発展のためには、この観光本義の実現が是非必要だと考える。

それは一つの国に限るものではない。學術の淵藪という大学にしても同じことである。創立七十年というが、教養部の前身である旧第三高等学校を数えるならば、京都大学も百年をこえる歴史がある。大学も百年経てば、その歩んだ歴史と生み出した研究成果を一堂に展示して、大学観光にふみ切ってもよいのではあるまいか。

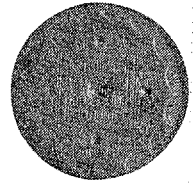
京都大学は、その点では文化財に富んでいる。ただ残念なことには、はまだその価値について無関心である。明治二十年、吉田松蔭の遺志を果すため品川弥次郎が設立した尊攘堂は、京大開学とともに移築されているが、その説明の表示すらない。また奇しくも同年、京都の産業近代化の象徴のごとく建設された旧京都織物会社の建築も、京大の所有となったものの、早晚撤去の運命にあるらしい。その他、開学当初の赤煉瓦の明治建築は、つぎつぎに姿を消してしまった。まったく惜しい。何とか歴史的資料として保存できないものであろうか。

それらの建築とともに、大学の歴史を物語る資料は、この際、ぜひ観光資源として活用したい。旧三高の舎密局いらいの資料などは、まったく日本近代教育史をさながらに示す貴重なものである。全国に比類のないものと云ってもよい。さらに大学じたいの七十年の歩みのなかに積み重ねられた各学部・研究所の先学たちの業績を、大学の資料館に収集し、ながく保管・展示することが、どれだけ大きく教育に役立つか知れないと思う。それこそ大学の光というべきものである。



講演

夏期講座（昭和四十七年度）



八月一日——三日
於本館ロビー

二〇世紀初期の日本と中国

——漢冶萍公司を中心に——

副島 円 照

漢冶萍煤鉄廠有限公司は日本帝国主義の対中国侵略の中でも重要な位置をしめ、その盛衰は半植民地における企業の矛盾を集中的に表現していた。漢冶萍公司是漢陽鉄廠、大冶鉄山、萍郷炭鉱を合併したものである。漢陽鉄道は張之洞により、京漢鉄道の資材供給を直接的契機として一八九三年に設立、大冶鉄山も九〇年以降開発され、やや遅れて萍郷炭坑の開掘も計画された。

一八九八年、督弁盛宣懷が借款計画を進めるや、當時の上海総領事小田切万寿之助はわりこみをはかり、資金を供給して鉄廠、鉄山の管理権の掌握をもくろんだ。この借款供与はドイツに出しぬかれ流産したが、以後、日本の企図は一貫してつづけられる。その最初の具体化が九九年の大冶鉄山鉄石買入契約、翌年の改正契約であった。ここに鉄鉱石の日本への独占的供給への道がひらかれた。

一方、日本の官営製鉄所においては当初国内の鉄鉱石の利用が考えられ、鉱山の開発がすすめられたが、この開発は予定どおり進行せず、一九〇一年の八幡製鉄所操業開始期にも原料鉄鉱石の国内確保のみとおしはたっていなかった。鉄鉱石の輸入は鉄鋼業の確立にとって至上命令となり、ここに中国の鉄鉱石が大きくうかび上る。日本の鉄鋼業は半植民地中国の原料を基礎として成立する。そしてその原料確保の楨杆としてもちいられたのが借款である。一九〇四年に調印された三〇〇万円借款は大冶鉄山を担保とし、鉱石代価をもって元利償還にあてるというもので、借款供与による金融的支配への突破口をきりひろくものであった。

翌一九〇五年、日露戦争直後の閣議決定はさらにすすんで、採掘権、管理権は将来日本の手に帰することを決定した。日露戦争後、借款は累積していった。一

九〇八年漢冶萍公司の設立に際して日本は合弁を策したが、これは実現しなかった。しかし辛亥革命後、日本に亡命した盛宣懷と合弁の仮契約が結ばれ、南京臨時政府もこれを承認した。これは株主總會で一人は取り消されたが、一三年一二月の借款契約において日本の借款優先権、日本人最高顧問技師、会計顧問の聘用がとりきめられ、事実上の金融支配が確立した。第一次大戦中、公司は相当の収益をあげたが、市場価格の高騰にもかかわらず、日本への納入価格はほとんど固定されたままで、大戦後赤字に転落、以後経営は悪化をつづけ、二年には鋼材、五年には銑鉄生産が中止され、以後は日本製鉄業の原料部門としての鉄鉱石生産のみが残されることになった。

現代の内縁問題

——とくに重婚的内縁の問題について——

太田 武男

一、ここに「重婚的内縁」とは、法律上の婚姻関係にある配偶者の一方が、第三者と事実上の婚姻関係

(内縁関係) にはいった場合の当該内縁関係をいう。しかし、その関係が内縁というるためには、それと競合している法律上の婚姻関係の実質が、主観的にも客観的にも完全もしくはそれに近い程度に失われていること、すなわち戸籍の上に形骸を止めているにすぎない程度に破綻していることを要する。

二、問題は、右の如き意味における重婚的内縁もまた通常の内縁と同様に、法的保護に値するものというるかのである。学説・判例の態度は、必ずしも一つではなく、また時代とともに推移のあとがみうけられることは興味深い。昨今では、そのような内縁も公序良俗に反するものとはみらるべきではなく、むしろ有効な保護に値するものとして取扱わるべきであるとの見解が支配的であり、具体的な裁判例の実際においても、不当放棄の救済のみならず離婚による財産分与の規定の準用をも認めた事例、内縁の夫の死亡に際して当該重婚的内縁の妻に当該家屋における居住の継続を認めた事例、さらには、重婚的内縁関係にあった夫の事故死に際して、当該内縁の妻の慰藉料請求を認めた事例などが登場していたが、最近ではさらに、重婚的内縁関係にある法律上の夫に対する法律上の妻からの婚姻費用分担請求事件が数多く登場し、当該夫の他女との間に現存する重婚的内縁関係を如何に評価す

べきかの問題が話題となっている。しかし、右は、具体的には、別居中の法律上の妻から、他の女性と重婚の内縁にある夫に対する婚姻費用分担請求事件において、その数額の決定について、当該夫と重婚の内縁関係にある女性の生活費や、当該夫と重婚の内縁関係にある女性との間の未成年子の養育費をも考慮すべきかの問題として展開している。しかし、右の問題に対する学者ならびに裁判官の見解は必ずしも一つではなく、積極・消極両説に分かれているのが現状である。

三、残る問題は、内縁の配偶者を法律上の配偶者と同視もしくは同等に取扱わんとする社会立法において、重婚の内縁配偶者が如何に取扱われているかの問題である。しかし、具体的な法条の実際において、直接、その問題に言及したものは見当たらないが、昭和三八年の大蔵省主計局からの照会に対する法制意見——国家公務員共済組合法二条一項二号イという「配偶者」の意義について——は、右にふれ、「届出による婚姻関係が、その実体を失ったものになっているとき」には、その婚姻関係と競合する重婚の内縁の配偶者も、右同法二条にいわゆる「配偶者」に該当するとの解釈態度を示していた。参考までに附言しておく（なお、これら重婚の内縁をめぐる諸問題については、拙著『夫婦の法律（新版）』（有斐閣・近刊）中の「重婚の

内縁の法律関係」の節を参照せられたい）。

半植民地中国社会と

変革思想

狭間直樹

十九世紀中葉のアヘン戦争以後の近代中国社会が半植民地半封建社会と規定されることは、ほとんど通説といってよい。南京条約以来、領土主権や関税自主権の喪失等々に象徴される半植民地化は年とともに深化し、ついに義和団戦争の敗北とそれにつづく辛丑条約で決定的となった。

この義和団以前の变革思想は、「地主階級改良思想の先駆」とされる龔自珍にはじまり、富国強兵のために欧米の科学技術の採用をいう馮桂芬、さらに欧米の政治制度をモデルとした改革を唱える鄭觀應、康有為にいたるまで、ブルジョア改良主義思想がその主流である。その半植民地的性格は、黎澍も指摘するように、康有為の大同エートピア思想が封建主義反対のそれとしてうちだされているというところにも端的に刻印されているのである。

ついで、義和団以後となると、変革思想の新たな潮流として革命派が抬頭する。この革命思想は、「現実」の支配者たる満州王朝の打倒を中心点とする変革のプログラムをその内容とするものであった。孫文の「政治革命と社会革命を同時にやって、その成果を一役に畢る」との構想は、半植民地におけるブルジョア急進主義がその発生基盤としての社会関係を反映したものであった。つまり、当時においては、資本主義的發展の道としてしか考えられなかった富国強兵の達成と、ひろく人民大衆を解放せねばならないとの願望——この二重の課題の解決のために、かれら革命派は政治的平等と経済的平等とを同時に実現しうる方策の探究にたえず駆りたてられねばならなかったのである。

ところで、孫文は、当時の中国には「経済的階級」はない、との認識にたっていた。この階級観点の欠落は、革命の眞の担い手を見失わせ、「国民」一般に拡散させるものであったが、それはまさに中国のブルジョアジーが革命的でありうるための必須の条件であった。また、これは帝国主義にたいする幻想と対をなす革命派の認識の欠点であるが、それは孫文においては、かの「実業計画」においてさえ、まだ「外国資本主義をもって中国の社会主義を建設し」、その恩恵を全国民に蒙らせる、と書かしめるほどのものであった。

辛亥革命の挫折は、さらに新しい潮流の抬頭を準備し、ここに五四運動が必然ならしめられたのであるが、正確なる認識と実践の結合としての毛沢東の大衆路線が革命運動の主流となるには、まだ若干の時間を必要としたのである。

地獄・極楽

牧田諦亮

人間にとって極楽こそは願わしく、地獄こそはうとましきもののかぎりではあるが、よくしたことに、地獄は入りやすく、極楽には生れがたい。一休和尚は近頃の言葉でいえば反俗のやからであるから、仏界入りやすく、魔界入りがたしとひねくっている。この書を川端康成はとくに愛したというから、今頃はどこかで地獄問答をくりかえしているかも知れない。インドから中央アジアの諸地域を経て五百年かかってようやく中国にたどりついた仏教が、最初は黄老の方術と同じ次元でしか受け入れられなかったことは、宣教師にとっては不満であったに違いない。地獄・極楽も、仏教

宣布の上には有力な役割を果たしたと思われるが、果してそうであろうか。

中国を旅して感じたことは（もちろん昭和十年代のこと）、いたるところに廟があり、大なり小なりの差はあっても、そこに願をこめる中国人の神・仏への希みは「有求必応」の額が代弁していることであつた。

これは、中国に仏教が入つた一世紀の頃から現代まで、善因善果惡因惡果の結果として、惡を行すれば地獄が鬼がまぢかまえ、善を行すれば極楽（中国では天宮・天堂の方が喜ばれ、極楽の名が普遍化するのには浄土教の隆盛を見る六朝末期から唐代にかけてであるが）が仏が待ちかまえていてくれるとする安易な受けとめかたとあい通ずるものがある。中国で仏教は大いにさかえ、多くの仏教学者が出たが、結局は宗派的な發展はなかつた。禪といい、浄土といい、真言といつても、これを受けいれる側の論理はいずれをも一丸にこなしたような形で消化していった。禪淨混融といい、三教一致という、この言葉ですら、決して受けいれた側の發想ではない。求めあれば必ず応ずという考え方は、キリスト教にいう求めよさらば与えられんとは、少し次元がちがうようである。キリスト教の場合は絶大な神の慈悲が先にたつが、中国の場合は、庶民のむきだし欲望がぎらぎらと光っているようである。地獄・

極楽の考えは。親鸞のいうような地獄一定すみかぞかし、積極的な人間反省の場になつてはじめて定着するものと思う。その意味では最近の日本ではかつての中国での有求必応的な欲望がぎらぎらしているようである。地獄はますます私たちに近づいてくる。

ルソーの社会観

樋口 謹一

ルソーは、かれが理想とする国家を、人間がうちたてるにいたつた時点について、次のようにいつている。

「わたしは想定する——人間は、自然状態において生存することを妨げるもろもろの障害が、その抵抗力によつて、各個人が自然状態にとどまろうとして使用する力に凌駕するに至る時点にまで到達した、と。そうなると、この原始状態はもはや存続しえなくなる。そして、人類は、もしその在りかたを変えなければ、滅びるであらう」（『社会契約論』第一編第六章）。

この同じ時点について、人間をつきうごかした動機

はいかなるものだったか。要するに「完成された人為 (art perfectionné) によって、始められた人為 (art commencé) が自然にたいして加えた悪をつぐなおつ」(同草稿。第一編第二章)。

人間存在にとっての生と死との分岐点ともいふべきこの時点は、『人間不平等起源論』と関連づけて考えると、『普遍的闘争状態』である。それにいたる人類の発展を跡づけると、土地の耕作がはじまると、その分配、継続的占有、所有がもたらされ、これに鉱業その他の技術や言語が加わって、財産の不平等が生まれる。これとともに、人間のあらゆる知的・道德的能力も展開し、理性がめざめ、競争と対投、利害の対立が激化し、他の犠牲において自利をはかる「自尊心」も生ずる。

「生まれたばかりの社会は、もっとも恐るべき闘争状態に席を譲った」(『不平等論』第二部)のである。そこでは、「自分の利益のためには、実際の自分とは異なったふうに見せることが必要」となり、「あること (être) 存在」と見えること (paraître=外見) とがまったく異なった二つのもの」となる。人間は「自分の外で (hors de lui) 生きており、他人の意見でしか生きられない。そして、いわば、ただ他人の判断だけから自分自身の存在の感情をひきだしている」。

要するに、普遍的闘争状態は、『普遍的疎外状態』でもあるのだ。この恐るべき状態、くりかえして言えば人間の生と死とを分かちつ時点は、ルソーをして言わしめれば、今なおつづいているということになる。こうした社会観こそ、かれルソーをして理想の国家を追求させたものであった。そして、かれの追求のかなめの一つは次の一文のうちに求められよう。

「特殊的利害 (intérêts particuliers) の対立が、社会 (いわゆる「完成された人為」、すなわち理想の国家) の設立を必要ならしめたとすれば、社会の設立を可能ならしめたものは、特殊的利害そのものの一致である」(『社会契約論』第二篇第一章)。

プルドンの社会思想

阪 上 孝

プルドンの思想が意外な現代性をもつものとして注目されてきたのは、昭和四〇年頃からであろう。スターリン批判がマルクス主義自体のある程度の相対化を含みながら「深化」したことがその契機であった。

きわめて国家主義的なスターリン体制とは異なった「もう一つの社会主義」(M・ブーバー)としてのプルドン思想がとりあげられたのである。

いうまでもなくプルドンのこのような復活は、プルドン思想の内在的な規定と思想史における位置確定とを促す。「矛盾の人」プルドンの矛盾を、小ブルジョア的思想家の特質として処理するのではなくて、理論的問題として立入って検討することが要求されるのである。

プルドンの矛盾をかれの理論的企図と理論的問題構成との葛藤・相剋としてとらえること、それを通じてかれが矛盾という形式で提起している諸問題を析出すること——わたしが「夏期講座」で果たそうとした

人のうごき

昭和四十七年四月二日——一〇月三十一日

三浦国雄を助手(東方部)に採用(五月一六日付)。

野村雅一を助手(西洋部)に採用(七月一五日付)。

会田雄次教授は、京都大学第三次ヨーロッパ学術調査隊長として、六月二日より七月一七日、飯沼二郎助教授は六月二日より九月二二日、中村賢二郎助教授は六月二日より一〇月一三日、井上恵司・樺山紘一助手は六月二日より

のは、これであつた。その諸問題とは、たとえば、所有の法律的諸規定と経済的内容との区別と関係の問題、社会と個人という古典的二分法そのものが含む問題、

国家と社会の経済的構造との区別と関係の問題、革命運動における自然発生性と組織性の問題、などである。これらの問題に注目するかぎり、プルドンの思想とそれがはらむ矛盾とは、すでに解決済みと見なすことはできない。マルクスのプルドン批判をさらに深化し、これらの諸問題にかんする真にマルクス主義的な問題構成、解答を確定することなしには、プルドンの思想にたいする真に有効な批判を行なうことはできない。プルドンの理論的矛盾は、われわれをこれらの今日の意味をもつ問題の前に立たせるのである。

り二月二〇日、前川和也・松原正毅助手は、七月三日より明年一月一日、帰国予定で、ヨーロッパ各地の研究調査のために出張。

桑山正進助手(東方部)は、七月二三日より十一月二八日・

田中重雄助手(東方部)は、八月六日より十二月二三日まで、京都大学中央アジア学術調査隊員として、イラン・パキスタン国に出張。

日比野丈夫教授(東方部)は、七月二二日より九月三〇日まで、東南アジアと中国の交渉史に関する研究のため、東南アジア各地に出張。

書 評

林 巳 奈 夫 『中国殷周時代の武器』

(B5判、六四三頁、京大人文科学研究所)

著者の林さんが以前に発表した「車馬行列」の大論文を、ある海外の学者がたしか

Splendid と批評していた。こんどの著書もまたそれ以上のSplendidな大作である。

はじめに方法の提示がある。なるべく正

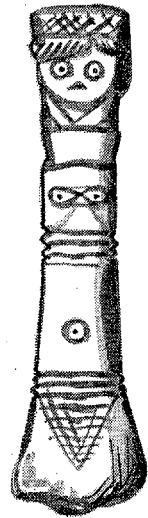
確な年代の知られる遺跡からの武器資料の観察とその特徴の記述、ついで機能の推測という方法である。ごくあたり前のことなのだが、これが実行されていないのが中国考古学の現状であると著者はいう。そして

その方法を「ストイックに実行」したのである作品なのである。

従って構成は各章ほぼ同じものとなる。

まずターミノロジーの検討。「周礼考工記」などの文献上の武器や部分の名が、これまでの経学者の解釈や諸研究の成果を批判しつつ定められ、ついでそれらは遺物と対比される。豊富な遺物の例示は、いつもながら林さんの独壇場というところだ。こうして戈、戟から矛、弓、矢から甲冑まで、あらゆる武器が考証されてゆく。

これらにつづく第十二章は武装と戦法の變遷の考察。攻撃用兵器と防禦用とがたがいに対応しあって変化してゆく、とするの



が著者の基本的な見解のようだ。たとえば春秋期、戈の形式は斬刺両用のものとして著しく変化する。これは新しい型の甲が生れたからと説明される。たしかに攻撃と防禦はいつも互いにその変化を促進しうるものである。また戦車が消滅しこれが歩兵や騎兵に代っていったことについては、領土、人民が大規模となり、戦争規模の大きくなったことが理由とされる。だが国土の増大がそのまま戦法の変化となったとするのは、春秋から戦国にかけての文化が純粹に連続しているとの前提の上のこととなる。趙武靈王の説話のような、異質の戦争技術の導入による変化を考えることはできないものだろうか。

付論に後殷期文化の基礎的編年及び春秋戦国の青銅器の絶対年代の研究がある。そのうち區羌鐘の解釈は、一九三一年来の多

くの諸説が要領よくまとめて解説されていて特におもしろい。

六百頁をこえるこの大著を十分に批評することはこのスペースではむづかしい。た

多田道太郎 『しぐさの日本文化』

(B6判 三二頁 筑摩書房)

だ著者のいう「殷周文化の認識」のための武器の研究の目的は、十分に果されたともわれる。

(吉田光邦)

むづかしいものである。それも書評の名人の本の書評なのだから、なおさら気が重たい。ふと他人の書評が気になった。すでに何種類も書かれた書評のドンジリに書くのなら、いっそ、今まで出揃った書評のまた書評というのは如何。これも一つの趣向になろうか。

管見に入った書評はすべて十本。まだ見落しもあるが、この数は決して少ないとはいえない。いわば、本書の世に迎えられることのいかに速やかなるかを証する一例である。書評全般の調子は絶讃に終始してほとんど批判がましい書評は皆無であった。本書に啓発されることの多かった私は大いに意を強うしたのであるが、一方では

いささか気が抜けた。なるほど書評とは絶讃するか無視するか、いずれかなのであるう。

しぐさという無意識下の動作に注目し、これをおして変らざる日本人の行動様式、さらに文化の原初性を引きだそうとした氏の手法のあざやかさに、評者の感嘆の聲が集中したのは、まことにもっともなことであった。氏の方法をフロイトの方法に比較した評もある。しかも可視的に比較可能なしぐさの方がよりすぐれた方法だと評価するのである。他の評者が多く思いうかべたのは柳田国男であった。なるほど柳田の所説を引くことが多いところよりして、「柳田の正統的継承」を氏に見いだしたの

もけだし当然であろう。

私の見るところ、しかし氏と柳田とは少しく異なるように思える。むしろ氏が数ヶ所できめ手に使っている折口信夫の方がはるかに著者の方法に近い。柳田の緻密な採集、比較ではなく、折口の思いがけない結びつけかた、豊かな想像が生まれるべき余白を残した発想という点で（この本に何となく余白が多いのも、単に組み方の問題ではなく、著者の発想に由来するのじゃないだろうか）。

しいて評者の批判らしき言葉を探せば、問題のとりあげ方が、主観的、ランダム、没価値的ということだが、これとても批判というより、著者のこうした態度におおむね評者は好意を表すばかりか、非論理的であるがゆえに説得力ありと、逆説めいて述べたてたのは、評者達が、いかに論理やら客観性やら、似て非なる理屈づくりに目頃なやまされていくか語るに落ちた。ついでにもう一点。書評は本書のいずれかの部分を引用して論を展開しているが、ことに本書のどの節に注目することが多かったかといえは、「がんばる」が十本中三本で断然一位。「すわる」「しゃがむ」「ものまね」が

二本でこれにつづく。それほどに「がんばる」に共感する者が多かった。これまた評者を含めて我々読者が、がんばることにい

かにくたびれているか、語るに落ちたといふべきか。

(熊倉功夫)

林屋辰三郎・上田正昭・山田宗睦編

『日本の道』——その源流と展開

(B6判、二九四頁、講談社)

四十歳になったら四国八十八ヶ所礼所巡りをやろうと今から心にきめている。何故かときかれてもうまく答えられない。尤も、僕が四十になる頃には遍路みちはもう消えてしまっているかも知れないが。近頃ブームの、大酒飲んで野垂れ死んだ漂泊の俳人種田山頭火は以前から何となく好きだった。この『日本の道』を読むと、そういう僕の心情はどこかで父祖たちの歩んだ道とつながっているらしい。

この本は「あとがき」によると、一九七一年の三月から六十三回にわたって読売新聞紙上に連載された「日本の道」シリーズを骨子として出来あがった。この企画のきっかけになったのは、某有名作家割腹事件が呼び起こした武士道ものの大流行であっ

た。最初と最後に撰者三氏による座談会が置かれ、本文は「道の再発見」と「道を拓いた人々」の二章に分かたれている。撰者三氏を含めて十八人の執筆者がめいめい自由なエッセーを綴っているが、「みち」から「どう」への転落史を語りつつ「どう」ではない未知なる「みち」の模索というテーマは全篇を一貫して流れている。中国の歴史書の体裁に擬して云えば、第一章は帝王の歴史ならぬ道の歴史を記す本紀の部分に、第二章は道というこの歴史の神を動かした人物群像を描く列伝の部分に各々該当すると思えばよろしいか。

僕は日本史学界における定説というものには暗いが、この本の魅力のひとつは世間的な常識や固定観念を説得力をもって破つてゆく柔軟な思考にある。このような姿勢は本書で頻用される「しかし、はたしてそうか」という反問形式に最も端的に現われている。「しかし大石義雄ははたしてそのような忠誠心の権化と見なされるような人物だったのだろうか」(一四三頁)「ところで(大塩)平八郎ははたして真に民衆の味方として徳川幕府を倒そうとあのような騒動を起こしたのであるうか」(一四八頁)。このような眼は武士道の虚偽を発かすにはおかない。「武士の最上層部ではまったく無視されながら、下層の家臣団一般に対しては声を大にして説教された」武士道は、「もっと粗野だがより雄渾な活気に満ちた人間的なものである」中世の「もののふのみち」の硬直態であり、その最大の徳目であった忠義も実際には形骸化していたと南条範夫氏は云う。何故「葉隠」の作者は自殺しなかったのかという疑問で始まる松浦玲氏の山本常朝論は次のように結ばれる。「常朝は死ぬべきところを生きつづけたからこそ、自分も死ぬべきだったという結論を導き出すような武士道論を生み出し得た」と。氏の所説は武士道論議を越えて、人間の生きざまとその思想との相関を鮮や

かに剔つていて僕には大変痛快であった。

本書が廻上にのほせているのはむろん武士道だけではない。「日本精神」はなにも武士道や所謂神道だけにあるのではないのだ。仏道、町人道、好色道、茶道、農民道、忍道等々多岐にわたるが、日本の芸能が「道を行き道に生き道に死んだ」盲僧や七道の者たちに始まるとする芸道論が僕には一番おもしろかった。というのは、先頃テレビで「暫女の道」というのをやっていて、村から村へ三昧線をひき語り門付して回る盲目の女旅芸人の姿を見た時、ひどく打たれた経験があるからである。もし日本精神への回帰ということが問題になるなら、彼女たちの世界へでなければならぬ。

日比野丈夫編『年表』（『世界の歴史』別巻）

この年表は「総合年表」と「特殊年表」と二本立てになっているのが特色である。分量もほぼ半ずつを占めている。この「特殊年表」は世界史の「重要な事件」の

とその時ふと思ったのである。そこには近代日本が置去りにした本物の何かがあった。キザに云えば人間という生き物のもつ悲しみみたいなものかも知れない。だから、「こういう社会の底辺にあった芸の者たちの残した細道の方が真実の歴史を語っている」という山田宗睦氏の所説は、僕の中へスナナリ入ってくる。

もう約束の紙数を遙かに越えてしまった。最後にひとつだけ文句を云わせて頂くな。第二章の「道を拓いた人々」の有名な重点主義はちょっと気になった。詳しく述べる余裕はないが、もっと無名の人脈を発掘すべきではなかったか。

（三浦国雄）

（B6判、四八八頁、河出書房新社）

他に、仏教史、キリスト教史、イスラム教史などの宗教史から科学、文化はては「名著史」におよぶ二八項目からなっている。序文で編者が「それらを一つ一つ見ていく

だけで、相当まとまった概念や知識を得ることが出来るから、それぞれが一種の読みものだといってよい。今までこうした年表には見られなかった、新しい試みとして誇りたいと思っている」と自負されるのもまたことにうべなるかなである。

項目の選択についていまいちあげつらうのは、ここではあまりふさわしいことでもあるまい。執筆者も紙数の関係で取捨選択に苦勞されたであろうから。たとえば「名著史」の一九四五年以降の部に、サルトル二冊、ルカーチ、チャーチル、ボーヴォワール、毛沢東、ウィルソン各一冊もかなりの苦心のたまものであるう。

ただ若干、小さいことではあるが、年表としては決定的に重要と思われることにについて凡例でふれられていないことを指摘しておきたい。それは陽暦によったのか、陰暦によったのかについてである。年代については西暦を用いるとあり、世界史の年表としては当然のことであるが、月日についてはことわりがない。西暦である以上、陽暦であるのは常識であり、別にことわるまでもないということになるかもしれないが、ただこの点で少し混乱があるようであ

る。二、三例をあげてみよう。まず日本について。

①「一八五三 六月 アメリカ使節ペリー 浦賀に來航。」ペリーの來航は陽曆七月八日、陰曆六月三日である。

②「七月 ロシア使節プチャーチン長崎に來航。」これは陽曆八月二日、陰曆七月一八日のことである。

③「一八五七 五月 アメリカと下田條約。」これは陽曆六月一七日、陰曆五月二六日のことである。

これが日本史の年表であるなら、一八七二年の太陽曆採用以前までは陰曆を用いるというのも凡例でことわりがあれば、そんなに筋がとおらぬことはないが、世界史の年表の一部分とする場合は陽曆に統一すべきであろう。そうしないと次の中国の例のような不都合なことがおこる。

①「一八九四 八月一日 日清戦争始まる。」これは陽曆である。

②「一八九八 八月 戊戌の政変。」これは陰曆で、陽曆では九月になる。

③「一九〇〇 六月二二日 列国に宣戦。」これは陽曆である。

つまり一つの国で対外関係については陽

曆、国内については陰曆で表示してある。これがもつとくわしい年表であつたら前後関係が逆になる危険性も十分にありうる。

他に些細なこと一つ。「特殊年表」の「中華人民共和国の成立の項で、一九四九年九月に「国都を『北京』と改称」とあり、そ

梅棹忠夫ほか編 『朝日講座・探検と冒険』 (全八巻)

(B6判、一九七二年一月〜八月、朝日新聞社)

I

およそへしるゝということとは、専ら概念操作だけによる認識であれ、本質的に攻撃的なものを含んでいるのではないだろうか。

とりわけ「へしるゝ」ということの原初形態である探検は、まず侵入という行為から始められる。さらにへしるゝ欲求を最大限充たすのは、いつの時代にも、ドミナントな文明の成員であるという問題がある。

その上、対象が人類社会である場合を考

の直後の一〇月一日に「北平天安門広場」とある。あるいは私は私に執筆者の真意がはかれないのかもしれないが、奇異に感じるのは事実である。編者、執筆者の苦勞を察するにやぶさかではないが、書物の性格上、あえてささやかな注文をのべさせていたいた。

(副島田照)

えるなら、探検家をその先導に、近代西洋文明が地球のほぼ全域を統合した二十世紀後半には、問題がさらに複雑化している。

他人の生活を「もの珍しいもの」として調べるだけではすまされない、と松原さんは言われる(第二巻)。探検をなしうる生活のゆとりが、探検されることに甘んじねばならない人々の生活の存在と無縁ではないことをへしつゝ人間は、今やへしるゝということの、とくに現代的な攻撃性が、己にもはねかえってくることを実感するだろう。大学探検部の低迷や解体という事態

は、これらの事情の感傷的表現と考えられる。

今、ニッポン国では、彼らにかわって無数の探検的「大衆」が簇々と登場しつつあるわけである。その大部分が国家や観光資本の管理から脱することができなくても、或る可能性を孕むものではないだろうか。つまり、情報の価値が慢性インフレになっている日常生活からぬけ出すべく試みられる探検は、先に述べた意味で「命がけ」の冒険となりうるのである。そこにいあわせる自己を含む世界像の獲得が、自己と世界の否定と変革を命ずる可能性である。

単なる見聞から、共同体への参加へと、へしるゝことの原初化が強まるほど、その攻撃性のはねかえりは強烈だろう。

梅棹先生が、「大衆探検時代」を「日本人の自己形成」の時代と言われる(第三巻)ことは、つまるところ、地球社会への積極かつ永続的な探検と一体になった、(地球人)への自己変革の時代ということを意味されていると考えたい。とりわけニッポンというこの奇妙な国を探検されている人々によって作られた第七巻が、私には印象的である。

加納一郎氏の古稀を記念して企画されたこの講座は、延べ三百人の多様な(愛知者)がにぎやかに登場する、現代の哲学講座であると私は考える。(横山俊夫)

II

この全八巻はひとつの探検百科全書である。従って、例えば今、水中生活を試みたいがいかなる心理的、物理的装備が必要か、あるいはイルカと話しができるだろうか、などと考えるとすれば、第八巻の中ほどを参照すればよい。そういう意味で大変便利な本だ。

梅棹先生は座談会形式で数多くの発言をしておられるが、特に私には「科学方法論と探検」(第八巻)の中で、科学というものはもともとシンボル操作だ、というくだりが大変面白かった。方程式や化学式の成否に一喜一憂するのは自然科学者には限らない。それどころか、人文科学者は苦心惨憺たるシンボル操作の末に、ある定式の影でも見出そうものなら、それが所詮シンボルであることを忘れ、実体を扱っていると感違いする傾向がある。その良い例が、十九世紀以来大発展した「印欧語比較

文法」である。印欧語族と呼ばれる諸言語に音韻の対応が見出され、印欧基語が復元された。多くの言語学者たちはそれが数学の関数の如きものであることを忘れ、あたかも実在した言語のように考えた。しかし、学校教育とマスコミに特色づけられる現代でさえ諸方言間にこれだけ大きな差があるのに、太古に於て均質な一言語を想定し得るのだろうか。ところが、「書齋派」というのは、シンボル操作に熱中する余り、そんな落し穴にすっぽりとハマる。ちなみに、今日なお、言語の系統樹を実体としての連続線とする議論が断えない。

梅棹先生には、イタリア調査時の経験に基づいて、次のような発言がある。「イタリア半島は、プロト・イタリアーノがあって、それが分解したのは違う。プロト・イタリアーノが成立するはるか以前から、それぞればらばらにラテン語が並行進化している。だから、むしろくちやに違う。」(第五巻)この説の当否はともかく、このように通説に対する疑問がどんどん飛び出してくるところに、「野外科学」の第一人者の真骨頂がある。しかし、その「野外科学」も科学である以上、シンボル操作であ

ることを免がれ得ず、自らシンボルを作りつつ「書齋」にいつか帰り着くのだろう。そこに、「書齋派」と「野外派」の共同の

可能性を私は見たいと思うのだが。

(野村雅一)

上山春平『神々の体系』(中公新書)

(新書判、一九四頁、中央公論社)

標題は、わが神代史(古事記、日本書紀)の神統譜が、その根幹的部分において、シンメトリックな整然たる体系をなしていることを言う。アメノミナカヌシより高天原系(タカミムスビ・イザナキ・アマテラス・ニニギ)と根の国系(カミムスビ・イサ

ナミ・スサノヲ・オホクニヌシ)が別れ、やがてイハレヒコ(神武天皇)に統合される。上山氏は、さきの大戦中、学徒出陣で乗りこんだ潜水艦の中でこの着想を得、あわただしく手帳に書きとめておいた。それが、四半世紀のうちに、精密に構築しあげられたのである(第一章、第二章)。

神統譜のこのような構造が何者かによってなんらかのイデオロギーのもとに、作為されたものであることは明らかである。津田左右吉博士の、「皇室の権威の由来を説かんが為」という説は、今日ほぼ定説と

されているが、上山氏はさらに一步を進めて天皇家と言わんよりは、藤原家の為に作為せられたとし、かつ津田氏が追求していない作為者の問題を論じて、その中心人物を藤原不比等と断定する(第三章、第四章、第五章)。

本書の内容を極度に要約すれば、右のようになるであろう。そこで展開せられるさまざまな推論、考証はきわめて多彩で興味津々たるものがあるが、しかし読みきったて前段と後段とのつながりは、必ずしも明白でない。藤原不比等が、藤原体制の創出の為に律令づくり、都城づくりと並んで、歴史づくりを試みたことは了解できる。律令体制とは即ち藤原体制であり、かの擬閣政治のごときは、むしろその藤原体制後期たるものにすぎない、という主張もおもしろい。しかし(その歴史作りの一環として

の)神代史が、あのような構造を持たなければならなかったことの必然性は、必ずしも明白ではないのである。高天原系・根の国系の対置が、天皇家・藤原家の対置とパラルドだというのは、それとも、中臣(藤原)家の先人の名が既に神話の中に挿入されている点に意味があるというのか(前者ならば、私は難点があると思う)。神統譜と藤原勃興史という二つのテーマが単に並置されているという印象を受ける。

第二の疑問は、氏のいわゆる深層文化論である。単なる神統譜におけるパラレリズムの指摘や藤原体制成立論のみならば、哲学者上山春平の手をわずらわすまでもなからう。本書の意味は、上山氏独特の深層文化論の観点にあるのでなければならぬ。氏によれば、弥生時代→明治時代の日本の「農業時代」において、三つの一氏独裁体制(天皇家、藤原家、徳川家)が成立しているが、この三者を通じて、後の体制は先の体制を象徴的に温存し、その権威を利用するという傾向が見られ、そこに日本の農業社会における政権移動の特質が存する、とする。この特質は、日本文化ネガ型説と関連していると思われるが、しかし要する

に、藤原体制論の深層文化論的意味付けは、あまり説得的に行なわれているように思えない。そもそも氏のいわゆる深層文化論なるものは、氏が参照を要請している『照葉樹林文化』によっても、和辻哲郎氏のかつてとなえた「日本文化の重層性」論とどう違うのか、その点の説明を聞きたい。

上山春平は哲学における武田泰淳、というのが私の持論である。「精神は、まわり

道を行く」という言葉がある。哲学学者でない哲学者として氏の思索のさらに包摂的ならんことを祈る。ただ、そのさい、気になるのは、その論理主義・図式主義の、時として、あまりに優勢に見える点である。しかしそれは、もともと、無理な懸念かもしれない。歴史家と哲学者の相違というものかもしれない。

(島田虔次)

荒井 健・興膳 宏 『文学論集』(『中国文明選』 一三卷)

(B6判、三九三頁、朝日新聞社)

詩論というのは、幸福な出会いの産物だ。詩は、女性と同じことで、「気」があらなければ秘密を明かしてくれない。だから詩論家は、浮「気」か、多「気」か、それとも深「気」(日本語では「ふかなさけ」か?)の人である。

ところでこの書評、そういう「気」のルールをまったく無視したところで書かねばならない。詩論を論ずるためには、こちらも多少は出会いの経験がなければならない

が、その点ではわたしは不幸者である。出会うべき対象を抜きにして、しかも一週間やそこらで、経験したかのようなふりをしなければならぬのだから、これはまたあわれな話ではないか。浮「気」か、多「気」か、それとも深「気」の人を相手に、りちぎ者が恋の話をするようなものである。どうやら見受けたところ、嚴羽は深「気」の人のようである。そして荒井さんも、これは間違ひなく深「気」の人である。

解説にいきなり村野四郎が出てくるのに驚かされるが、ボードレル、キイツ、ヴァレリイ、西脇に惚れた村野は浮「気」者だから、深「気」の荒井さんが怒るのも当然だろう。要するに、やっと十九世紀にあらわれた西欧の近代美女より、もっと古くから美をきわめていた中国の古典女性と見てほしい—というのである。

りちぎ者は、深「気」の人に共感する。それだけに荒井さんが、「六朝より宋への七百年の間に、意識的ならびに無意識的・宿命的」な詩の両面性を見る眼を養ってきた中国人の先取性を讀めるのに、ギローの『文体論』を引合いに出したのは、なんとも合点がゆかず、口惜しくてならない。ギローの説と、嚴羽—荒井の美学とは、まったく別の「気」に属するはずである。

詳しいことはどこかの飲み屋で補うことにして、簡単にいえば、「気象」の概念(荒井さんは、これを『詩品』と『滄浪詩話』の基礎概念とみる)は、西欧近代にはない。何よりもそれが、「文体」と「人体」を「深く相結んだ概念」(二七七頁)であり、同時にまた「時代の雰囲気」(三二二頁)をあらわすことにもなるからである。

これは西欧ではつい最近、ロラン・バルトが「エクリチュール」の概念でおぼろげに示したものである（『零度のエクリチュール』）。それをすでに十三世紀に著わしていたとすれば、これは西洋かぶれどもに怒る

程度ですむ話ではない。

深「氣」の人は、もっと怒るべきである。浮「氣」者は、村野ひとりではない。

（竹内成明）

梅原郁・衣川強編 『遼金元人伝記索引』

（B5判、三五九頁、京大人文科学研究所）

似たような目的のものに『遼金元伝記三十種綜合引得』（北平、一九四〇）というものがあるが、これはかんじんのところでは、正史・別史、それに若干の雜史類に見える諸伝記だけの索引であって、その材料になった碑誌伝状の類や若干の重要な雜史など（たとえば『婦潜志』、言いかえれば研究者にとっても必要なものが収められていないからである。私はこの『引得』に、そうしたものを折に触れては書込んで役に立てていた。元人の文集をひらくたびに、そんな書込みをふやして行くのは、文集を読むときの一つの楽しみでもあった。

した。

ところが、私の知らない間に、京都では梅原郁・衣川強両君の手で、倉田氏のはじめた仕事の仕上げが行なわれていて、この程りっぱな姿で本になった。その間の経緯をよく知らない私から見ると、あれよあれよと言ってる間の早業である。さきのド・ラケヴィルツ君の索引が二十三種の文集しか材料としていないのに対して、これは百三十種を使ったのだから、格段に充実していると言える。これからの遼金元史の研究者が少なからぬ恩恵をうけることも確かである。では、これで一応のことが尽されたかというところ、そうも行っていない。試みに私の書込みと比べたところが、あまり数多くない書込みなのに、この『索引』に出てないものが、いくつも見つかった。主として元初の蒙古人であるが、特別の材料に見えるものでなく、ここに使われた百三十種の文集の中の若干から拾い集めたものである。文集を読みながら『金史』『元史』の材料となった文章を見付け出す私の楽しみは、まだ消えてしまっていないようである。

リストリアへ帰ると早速 Index to Biographical Material in Chin and Yuan Literary Works, Canberra, 1971. を出版

（藤枝 晃）

故大谷勝真氏の敦煌写本

調査ノート

—敦煌写本の研究—

上山 大 峻

昭和四十七年七月十八日、韓国を訪れた際、ソウル市延世大学教授閔泳珪氏より、元京城帝大教授で東洋史学者の大谷勝真氏のノート計八冊を手わたされた。閔教授の語るところでは、「小さい方のノート（三冊）は鳥山さんのあずかっていたもの。大きい方のノート（五冊）は終戦当時古本屋に出ていたものを買いつつて、研究室に保管しておいたものである」という。大谷さんのゆかりの方にお返ししたいという閔教授の気持ちから、われわれ竜谷大学のものに託されることになったものである。

これらノートのうち、小寸の三冊はスタイン蒐集敦煌写本の調査ノート。大きい方はペリオ蒐集敦煌写本の調査ノートである。これはもともと六冊あったがいまはその第二冊を欠いている。ノートに記されている日時を辿ると、大谷氏は昭和二年十一月より同三年六月までパリ

で写本の実見調査にあたられた。このとき調査されたペリオ蒐集の写本は二〇九点を数える。スタイン蒐集の方も六四〇点に及ぶが、滞在日数から考えてこの数はわれわれの写本調査の常識をはるかに上まわるものである。

敦煌出土写本がヨーロッパにおさまってから、狩野、内藤、羽田らの諸先生が早速に渡欧して調査にあたられ、やがて矢吹慶輝博士の徹底的な古佚仏典調査が行なわれた。昭和二十三年在欧の大谷氏は時期的にはそれより遅れるが、日時をかけて多くの写本を手うつしする調査形態はこのあたりから始まったようである。続いて重松俊章、本田義英氏の渡欧があり、昭和七十八年、ペリオ蒐集の大部分の筆写を果し目録を作成された那波利貞氏に到る。其後、昭和十一年にかけて神田喜一郎博士のペリオ蒐集本の調査が為されたが、この時はすでに手うつしではなく、自らのカメラにおさめて帰るという方法を採られ、ここでまた写本調査に一つの転換をむかえた。大谷氏の調査の対象は、東洋史家の立場より文書類に集中しているが、仏典への注目も決して等閑にされてはいない。三階教の典籍に格別の興味をもっておられたこともうかがえる。

いまや氏の調査録文された写本の過半は本邦においてマイクロフィルムで見ることが出来る。スタイン蒐集

本はその全点が将来されているし、ペリオ蒐集にしても、われわれの欲するものの大部分はフィルムで入手された。したがって、未知の文献の内容を伝えるという意味からは、すでにこのノートに負うところは少ないかもしれない。しかし、氏がその学識と慧眼をもって直接現物に当たって調査された録文やメモのもつ学的価値は依然として失われていない。

いま、敦煌学草創期の先人達の労苦の跡を示す貴重な資料に接しえたことを喜ぶとともに、朝鮮動乱の中、このノートを保管され、われわれのもとにお返し下さった関教授の配慮と好意に感謝するものである。

報告書「社会主義運動史論」

(仮題)作成をめざして

— 社会運動の研究 —

渡 部 徹

第一号の「共同研究のうごき」で、「班として二期目をむかえた。……この期間中になんらかの形で研究報告を出版したいと考えている」とかいた。ついで第三号で、

班員の田中真人君が「幅広いテーマを概括し総括していくという作業は、目下のところ、研究会全体のものになりきれていない」。「例えば、具体的には報告集として、どうまとめていくか」が問題だと指摘してくれた。

たしかに、まとまった形の報告書ができるかどうか、不安を感じないではなかった。とくに、私自身が、前号の「共同研究のうごき」にかいたように、この班の期間中、班の研究課題と大分かけはなれた仕事に忙殺され、班研究の推進力となりえなかったから、なおさらであった。しかし、同時に、研究会での討論の多くに、「コミンテルンの影響を各国において十分分析し、日本の場合と比較することなしには、日本の社会主義運動は検討できない」との共通の問題意識がきわめて明瞭であったから、一九一〇〜三〇年代の各分野の運動に広くわたるとしても、おのずから、論点は統一されうるだろうとの予測もあった。

七月、具体的に、執筆についての打合せ会をひらいたところ、果して、期せずして内容の大綱において、報告書としてまとまることになった。執筆予定者は、所外の富岡次郎・松尾尊兌・斉藤勇・福本茂雄・太田雅夫・辻野功・秋定嘉和・田中真人に、渡部・飛鳥井を加えた一〇名である。

たまたま、この直後にでた『日本共産党の五十年』は、まへの「四十年」・「四五年」の冒頭のかきだし——「日本共産党は、第一次世界大戦後における世界労働者階級の解放闘争のたかまりのなかで、ロシア十月社会主義革命（「四十年」では「大革命」）の影響のもとに、わが国の進歩と革命の伝統をうけついで……創立されました」——を、「日本共産党は……わが国の進歩と革命の伝統をうけついで……創立された」と改めたことにもうかがえるように、コミンテルンの役割を極力抹殺する方向——事実全く反して——をつとめている。われわれの報告書は、偶然にも、このような偏向への科学的批判の役割を果たすことにもなるであろう。

イメージと精神

——理論人類学の研究——

野村 雅一

社会人類学の研究班では現在所内の班員三名がヨーロッパ調査のため渡欧中だが、今秋は主として所外の班員から意欲的な報告がなされた。特にロールシャハ・テスト

トの権威である藤岡喜愛氏（兵庫医大）が一貫して追求している「イメージ論」は理論人類学上の課題として大変興味深いものである。今回は数十人の描いたバウム（スイスのコッホがひろめたもので、木の絵を描かせてパーソナリティ等の情報を得るための材料とする）によるイメージ表現を例に引きながら、あわせて心身症の患者が抱くイメージも取り扱われた。氏の立場は、我々の精神をイメージのタンクとして捉えるものだが、今回の報告では身体も精神の潜在過程として位置づけられている。我々は発育の初期において形成されたパターンと関連しながら外界をイメージに構成し、その過程で外界からの影響を受けるのだが、そのころのパターンはからだとは密接に結びついている。このことが心身症や分裂病特有の姿勢を説明している。心身はまさに一如なのである。それがまた、報告で資料とされた数多くの絵（イメージ）の中で、忙がしい、のんびりというような身体運動感覚を伴う観念はほぼ似通ったものとして描かれ、了解も容易なこと、つまりイメージとしての定着度が高いことの理由となる。藤岡氏のこのイメージ論は、イメージとその表現、イメージと意味との関係の考察が今後一層進むにつれて、精神人類学のみならず言語学的意味論にとってもその重要性が明らかにって行くと思われる。

漢書の研究

川 勝 義 雄

『漢書』はいうまでもなく『史記』と並んで、中国の史書における古典中の古典である。最初は、梅原・永田・衣川・橋本らの諸氏と一しょに、我々の共通の基礎教養として、これの口語訳を作りながら、しっかり読んでみようということで、『本紀』から訳稿を作りはじめたのが三年あまり前のことであつた。しかし、『高帝本紀』を終るところから、一人ではなかなか通読できない『志』の部分を読もうということになって、橋本氏は『律曆志』の、他のものはかわるがわる『食貨志』の訳稿を作りながら、みんなで検討し訂正することにした。その後、メンバーはふえて、桑山・愛宕の両氏が加わり、所外からも京都女子大の狩野直禎氏が加わられた。

『食貨志』は中国古代経済史の基本テキストとして早くから注目されたもので、加藤繁氏の訳もあり、スワン女史の英訳もあるが、近年までの漢代史研究の諸成果を考えると、それらの訳にはかなりの不備が発見される。それを訂正しつつ、我々は新訳を作りおえたが、新訳の

根拠を示すためには、最近の研究成果をふまえた詳細な註が必要である。漢代史の専家である永田氏は、目下意欲的にその作成にとりくんでいる。会読ではすでに『食貨志』を終えて、『溝洫志』の訳稿を検討しているところである。

『律曆志』については、いうまでもなくすでに藪内清教授の研究があつて、我々の依拠すべき基礎になっているが、原文の叙述に密着して、そこに表わされる古代中国人の思惟過程を追跡しつつ現代語訳を行なうとなると、まだまだ多くの困難が残されている。それを我々の理解できる形に解きほぐしながら、口語訳を作っている。したがって、現在では『溝洫志』と『律曆志』を交互にまじえながら、週一回の研究会をつづけている。このように、最初はただ古典を読むための集まりであつた段階から、しだいに研究的な傾向が増してきたので、今春、正式の研究班結成を申請し、認可された。『漢書』の『志』は、中国古代文化をジャンルごとに綜合整理した古代人の手になる古代史の金字塔である。現段階において我々に可能なかぎり、これを正確に理解することは、我々の古代史研究の基礎を固めるために不可欠な作業である。これが我々のさしあたつての目的であるが、さらにこの『志』は後世中国の史書の模範であつたから、やがて我

々が後世のそれとの比較研究に及ぶ場合にも、確実な礎石と基準をこの研究は提供するにちがいない。

仏教史学史の研究

牧田諦亮

昨春からの仏祖統紀の会読を中心に、中国仏教史学史といったものを考えてきた。今日の中国では毛沢東思想の徹底から宗教の存在は政府にとっては全く不必要のものとなった。一九五七年に二ヶ月旅行した時は、仏教は限定された優遇下にあり、房山石窟の大調査事業が中国仏教協会の手で行なわれ、あらたな資料も紹介され、数百人の袈裟をまとった比丘が北京の国慶節の遊行に参加するという一幕も奇異の眼で見た。この七月から六週間の中国旅行を終え北京・西安・蘇州・上海・広州の仏寺を見てきたシカゴ大学で宗教史を専攻するストロング夫妻（彼たちの外祖母が「中国からの手紙」を書いたアンナ・ルイズ・ストロングである）の写してきたスライドで、塵一つなく掃き清められた寺と、猫の子一匹いないがらんだうの寺と、六週間の旅で八人の僧侶、二三人の還俗した雍和宮のラマ僧を見ると、毛沢東思想の計り知れない圧力をおもい、いよいよ中国の仏教が中国人の頭

から消えさる日もまじかか、いや消えてしまったかのよう感じられた。千数百年来、日本の人と社会にはかり知れない影響を与えてきた中国の仏教、その歴史を研究することは陳垣・湯用彤ら二、三人の人を除いてここ数百年来、日本人の責任のようになっていくが、いよいよこれはタイヘンだ（武田泰淳のいいくさではないが）。

中国仏教史の研究は従来もさかに行なわれはしてきたが、ともすれば恣意的である。その根底としての系統的な仏教史学史の研究が当面の急務と思ひ、熱心な壮年の研究者とともに、ここ三、四年の間に、中国仏教史研究の基礎としての仏教史学史をまとめておきたい心づもりである。明治初年の「三国仏法伝通縁起」復刻に端を発した日本における中国仏教史研究でこの面が忘れられているかに思われることは、やはりわれわれ研究者の怠慢であることには相違ない。研究班では当面、仏祖統紀の会読（十月からは趙宋の建国からする近世仏教史の端緒からはじまる）と、研究発表をまじえながら、整理・研究の指向を考えるとともに、一部の班員の仕事としての中国高僧伝索引の編集刊行も継続して行なう努力を進めている。唐高僧伝索引上巻は組版中であり、下巻も近く脱稿する。これは昭和五十二年三月に全六巻の刊行を終える予定である。

異質と伝統

— 中西科学のある総合 —

橋本敬造

中国のように準静的平衡を保ちつつ緩やかな変化をとげた社会のなかに、異質文化が持ちこまれたとき、そこにいかなる反応が起るかということは、きわめて興味ある問題である。この一つの典型的な例が見られるのは、明末から清初におけるジェスイット宣教師団による西洋科学の導入の場合である。

この場合に二つの異なる文化は、いかなる反応を見せ、またいかなる融合を見せたか、中国における代表的な人物を選んで、その反応をかれらの著作のなかに発見しようとするのが当面の課題である。

もちろん、こうした課題を取りあげるときには、その現象がいかなるスペクトルとして取り出せるのかということが重要な問題になる。それは中国の伝統科学と近代科学とを、いかなる基準によって把握するかにかかってくるからである。一七世紀にヨーロッパにおいて近代科学が成立したという事実から、このとき以来中国の科学の伝統は後方にとり残されてしまい、その結果として中国は西洋を受容しなければならなくなつたという事実の方に、ともすれば関心が移りがちであるのはやむをえないことかもしれない。

しかし、だからこそ一七世紀から一八世紀はじめの中国の主要な科学者像の再検討を行なう必要がでてくると言える。李之藻、徐光啓、王錫闢、方中通、梅文鼎などは、この時代のもっとも重要な人物であつた。最初の二人は、ジェスイットの近くにあつて西洋科学の導入に努力した。王錫闢は西洋科学の厳密な批判者であつた。方中通は西洋科学のディレクタントであつた。こうしたさまざまな反応をつぶさに見て、梅文鼎はどういう態度を示し、どのような立場をとるようになったか。また、かれが活躍したときは、清朝初期の康熙年間であり、かれの考え方が固定したときは、徐光啓のときから一世紀近くたつていた。それがどういう意味をもつか。ここに当面の問題意識の源がある。

徐光啓はすでに「西洋を密解して、大統の型模に入れる」と述べていた。西洋の水利技術、および暦法の改良を目的とする天文学などを導入する場合の基本的な態度を示した言葉である。これはヨーロッパの有用な科学知識を、中国のなかに組込んでいくという立場を示している。しかし、梅文鼎の考え方は、これとは異なるものであつた。まず数学に关する著作を見てみると、それまでに翻訳されていた知識を、中国に存在していた規範にもとづいて理解していこうとする態度が読み取れる。

たとえば、幾何学的な諸知識は九数の第九章目の句股法によつて、また、導入された西洋数学の貧困な側面であり、一方、伝統数学に特徴的であつたすぐれた算術的側面については第八章目の方程法によつて秩序だて、数学の各分野の諸法

を系統づけようとした。こうして、量法と算法によって数学を二元論的に論じ、中西の別なく、古今の違いなく、すべての知識を総合しようとする試みを、かれは行なった。

また、かれの天文学研究においては、西洋の成果（ケプラーの師のチコ・ブラエの体系によって展開されている）を、中国の伝統の上に連続的に位置づけようとした。その努力を通じて、観測の集積によって天文学は精密化されるという考え方をはっきりと言明した。

こうした考え方の周辺、および社会的・時代的連関、またかれの生きた時代のとさきに書かれた資料についても考察を進めたいと考えている。以上は目下の関心事の一つである。

思想とイメージ

山下 正男

「あらかじめ感覚のなかに存在しなかったようないかなるものも、知性のなかには存在しえない」という哲学上有名なスローガンがある。その対偶をこれば、知性のなかにあるものはすべてあらかじめ感覚のなかにあったということになる。ところでいま知性のなかにあるものを思想とし、感覚のなかにあるものをイメージとすると、どんな思想もイメージにその起源をもつことになるだろう。あらまし以上のようなガイディング・プリンシプルによって私は目下、西ヨーロッパ思想と動物イメージの関連を考察中である。

ヨーロッパ中世はキリスト教思想全盛の時代であるが、そ

こでは羊——羊飼のイメージがくり返し出てくる。そしてこのペアが神とキリストになぞらえられたり、キリストとその信者になぞらえられたり、牧師とその教区民になぞらえられたりする。また羊——羊飼のペアに狼と牧羊犬をつけくわえたクワルテットのそれぞれに、カトリック教会——カトリック教徒——（異端撲滅のための）ドミニコ修道会——アルビ派（異端）が対応させられる。ここから明らかなように異端とは羊の持ち主である教会から、信者である羊を奪うものと表象され、そうした狼に対抗して犬が登場するというわけである。

ところで中世のキリスト教では悪魔は角と尻尾をもつものとして表象された。これは実はキリスト教以前に存在した「角のある神」なのであり、古い宗教の神が、キリスト教の神によって弾圧され、悪魔に仕立て上げられたものだったのである。鹿を始めとする角のある動物が狩猟民的イメージだとし、羊が牧畜民的イメージだとすれば、牛と馬は明らかに農民的イメージといえよう。西ヨーロッパとくにフランスでは、十世紀頃から多くの馬に犁を引っぱらせる農法が確立し、農業革命といわれるほどに生産力が増大した。そしてここで西ヨーロッパにおけるイメージは羊から馬に切り替えられる。

農民と牛の関係は、領主と農奴の関係、さらには教会と教会領民の關係の比喩に使用される。そして民衆のコントロールに際してまぐさと鞭というあいことばが使用される。ところが近世に入って出現した革命思想は、こんどは、クビキヤ手綱を振り切れ、轡を振り落とせといったたぐいの馬イメー

ジで表現される。

とはいえ他方、犁をひっぱる馬は、産業革命とともに蒸気エンジンによってとってかわられ、機械の時代の轡を切つて落とすが、その後もなん馬力（ホース・パワー）のエンジンといったことばの中に、機械と動物イメージの深いつながりを想起させるのである。

頽廢ということ

熊倉 功 夫

義務教育では当用漢字より習った事のない我々の世代は、むずかしい漢字になるとたんにお手上げである。それでも熟語で、正字が当用漢字にならないために音意ともに通う当用漢字を宛てるのにはいささか閉口する。頽廢の頽という字は勿論当用漢字にないから、ひどいことに退の字を流用して退廢と綴ることがある。ひょっとして退廢という用例が古来あるのかもしれないが、何となく字面だけみているとスクラップかなんぞを連想していやらしい。しかし私には頽廢という字も不満である。できたら廢は廢の字が使えないものか。頽廢と書くといかにも病みすさんだ、無慙な風俗文化の私のイメージにぴったりしてくる。

江戸時代後期の文化、就中化政文化を頽廢文化と呼びならわしてすでにひさしい。富国強兵をモットーとする健康な精神が、享楽のための文化を否定したのは至極もつとんどとし

ても、なにも我々まで一緒になって否定することはない。そこに化政文化を頽廢という否定的な形容をもつてすることへの反省が生まれた。化政文化を頽廢とおとしめることの時代が長かったのにくらべて、再評価の機運が生まれたのは近々十数年来のことにはすぎないが、しかし喜ぶべき一事であることにちがいない。

ところが、その再評価が、化政文化は頽廢文化ではなく健康な要素もあった、否むしろ近代的精神の母胎となる輝かしい文化であった、と逆評価なら、それは黒を白といひなすだけのあまりにも単純な座標軸の逆転にすぎない。すなわち後世の我々が化政文化を頽廢ととらえるか否かという問題ではもはや化政文化の研究は深化しないのである。いま考うべきは化政期の人間が自分自身の営みのなかで頽廢感（という言葉でくくれるような生活感情）に沈んでいたという事実である。さらにいえば、かつての輝かしい精神はすでになく我々は病んでいる、という想い。その想いはこりかたまって救いようもなく、救われたくもない。病み、すさむことによつてのみ生が全うされる、という妄想である。狂とか怨念とかいったカッコよさももはや、ない。時々、そういう時代がめぐってくるのである。

私の机の上には人文科学研究所で購った艶本研究第一期十三冊が並んでいる。歌麿や国貞や英泉の艶本は美しくも病んでいる。この病むゆえに美しかった文化（それは大正時代にも戦後にもあったと思うのだが）を呼ぶには、やはり別のついた頽廢の語がふさわしくはあるまいか。

文部省と本所附属東洋学文献センター共催

漢籍担当者講習会

文部省の情報図書館課、東京大学東洋文化研究所附属の東洋学文献センターと、本所の

センターとの間でかねがね準備を進めていた講習会が、本年度から発足した。受講者は全国の国公私立大学ならびに公共図書館で、漢籍の取扱いを担当する職員を対象とする。どこの大学、図書館でも漢籍を専門とする職員はほとんどなく、その整理や目録の作製が不統一なため、利用者に不便が多いのを改善しようというのが一つの目的である。

東京と京都とで毎年一回ずつ、一週間の講習会を開くこととし、京都がその第一回を受持ち、東京は秋にやることとなった。何分、初めての企画で見当がつかないため、受講者

を三十名と限ったが、文省部への申込みは八十名に近く、選択に苦しんだのち三十五名を受付けた。その範囲は東京から西は四国、九州の各地に及んでいる。会期は五月二十九日から六月三日まで。会場は人文科学研究所のセンターの閲覧室のほか、本部図書館の会議室を使用させていただいた。

講師は別表のように吉川名哲教授のほか、東京からの参加を得、研究所には研究部門、事務部門の全面的な援助をこうむった。とくに受講者の実習に重きをおいたため、東大東洋文化研究所の池田温、陳明新、沢谷昭次、京大文学部の笠沙雅章、本所の藤枝、梅原、荒井、永田、水野、愛宕の諸氏に指導員をお

願いした。陽明文庫では近衛家熙公ゆかりの大唐六典に関するもの、白氏文集関係の資料のほか、宋元版、朝鮮版、五山版の代表的な書籍を展覧してもらった。文部省側からは開会にあたって情報図書館課の吉川課長の挨拶があり、担当の石川係長が全期間にわたって参加した。

受講者はきわめて熱心で、最終日の討論にも活気が満ちていたのは喜ばしい。全員そろって終了証書を河野所長から手渡され拍手を受けた。この講習会をただこれだけに終ったものとせず、将来も密接な連絡をとって情報交換を行なうようにしたい、というのが全体に共通した意向であった。さらに進んで、漢籍の処理に関する全国的な連絡協議会を作り、総合目録の作成促進をしようとする意見まで出たのは、主催者側として望外の收穫だったといつてよい。

(日比野記)

会 場	午 前	午 後
五月二十九日(月) 三十日(火) 三十一日(水) 六月 一日(木) 二日(金) 三日(土) 京大図書館 人文科学研究所 京大図書館	漢籍について(吉川幸次郎) 東洋学文献センターの現状(尾上兼英、日比野丈夫) 子部書(福永光司) 実習 経部書(平岡武夫) スライド使用 朝鮮本について(田川孝三) 展観、解説 討論及び情報交換	目録学概論(倉田淳之助) 実習 史部書Ⅰ(川勝義雄) 実習 史部書Ⅱ(日比野丈夫) 実習 陽明文庫見学(説明、同文庫主事、名和修) 集部書、叢書、新学部書(市原亨吉) 実習

旅

仏独瑞伊駆け抜けの記

会 田 雄 次

社会主義國を旅した人の報告に、自由主義國へ入るとほっとするというのがよくあります。それとよく似た状況だと思えますが同じ自由主義諸國の旅といっても私はイタリアに入るとやれやれといった気分になります。とりわけ今度の旅は、ドイツ、スイスというすべてにガッチリ、つまり人との応接がゴチゴチ、ギスギスした国々からイタリア入りをしたので、そのやれやれの度が強かったようです。

私の主たる仕事は在外公館の關係方面によりしくと御挨拶とお願ひをして廻ることにあります。同行した調査隊の第一波の、飯沼、中村(賢)、樺山、井上の方々はヨーロッパははじめてですので一応よいも悪いもヨーロッパそのものであるパリにぶつかるべきだということで四、五日そこに滞在、六月二十五日ごろパリを立ちケルンに入り、飯沼さんと別れ、中村、樺山両君と一緒にライン河を廻り、バーゼルからスイスへ入り、チューリッヒで、ここで滞在調査をする予定の中村君と別れ、七月一日でしたか、樺

山君と一緒にサンゴタルドを越え、ミラノに入り、そこで偶然井上君と一緒になり、北中イタリアを廻りました。

ホッとしたというのは、まずイタリアが汚いからです。御承知のようにスイスの自然は腹が立つほど秀麗ですし、立ち並ぶ家々もお伽の國のように美しい。国全体が、山と芝生と花壇からできた公園といえます。たしかに道にはタバコ一本落ちていません。ところが國境をこえイタリアに入ったとたん、線路の両側は紙屑だらけ、家の屋根瓦はこわれ、壁は落ち、おしめこそあまり見当りませんが洗濯物の陳列館ということになる。吹いガラがどうのこのとうるさく文句をつける豚婆もいないし自由自在にタバコをすて、紙くずを散らかして歩ける気楽さというのがまずホッとする大きい要因でしょう。ミラノのいかめしく鉄格子をはめたビル窓は掃除もしたことがない。格子の上にも窓ガラスのわくにも何十年かけて蓄積されたほこりがこびりついています。ミラノでは毎日のように自動小銃をぶっ放す銀行強盗が出ます。もっともミラノは、トリノ市と並んでイタリアの經濟を全部ひつかぶっている町ですから真面目な働き手が多いのですが、南方、すでにローマともなれば、全員これ泥棒、サギ漢といつてよいでしょう。日本人はいかにも誠実そうに見せかけて但しませんが、その点イタリア人は立派で、はっきりだますぞということを態度で表現しつつそして見事にまんまとだまします。その代り、喫茶店のボーイ(おやじさん)に百リラでもチップをやれば、こんなうれいことはないという風に満面微笑をたたえ、大げさな身振りでサーヴィスしてくれます。すぐ顔を覚えて、次の日でも出かけるとすぐ見つけて飛んで来てくれます。千円わたしてもフンという顔を

する日本の宿の女中さんなど慚愧のあまり死んでもよいところだぐらいの気になる所以です。

すべてこれインチキ、そして楽しくて、こみやられては文句をつてつ、二、三百円で御大尽気分を味わう。そんなことをしながら二週間ほどイタリアを旅行し、七月十八日帰って参りました。残った方々は計画にしたがって鋭意調査活動中であります。

ミュンヘン大学のある日のこと

井 上 清

今年の一月中ごろから三月初めまで、私は西ドイツに滞在した。この旅行のそもその目的は、ミュンヘン大学の日本学科学生に、日本近代現代史の二、三の問題について、研究手引きのような話をし、また何かと研究上の援助をすることにあった。この大学の日本学科の教員陣は、古い日本の文学とか神道とかの専門家はかりで、明治維新とか日本近代史などにはほとんど関心さえないとのことである。

ある日、私が日本軍国主義について話をし、つづいて質問・討論のとき、日本語学の老先生が、「日本は一九世紀の終りごろまで、中国の皇帝に朝貢していた。日清戦争ではじめて日本は朝貢をやめることになった」といった。私は自分の耳を疑った。私のドイツ語学力はすこぶる貧弱なので、本当に私は何か聞きちがいをしたのだろうと思った。それでもやはり気になるので、かた

わらの日本人に、いまの先生の発言はこういう趣旨のように聞えたが、そうだったろうかときくと、たしかに、日本は清国に朝貢していた、といったとのことである。

そこで私はちょっとためらったが、こんなとほうもないことを、そのまま聞きのがしておくのも、学生たちに不親切すぎることになるので、先生にはわるいが、やっぱり訂正してもらおうと考えた。なおしばらく、だれかが反論するかもしれないと待ってみたが、だれも何も言わない。しかたなく私が、「先生の今の話は、何か感ちがいされているのではないか。おっしゃったような事実とは全然ない」というと、先生は、「いや、たしかに朝貢していた」とがんばる。私は「先生は、琉球王が日本天皇制に支配されるまで、中国に朝貢していたことと感ちがいされているではありませんか」と重ねていったが、先生は、「そんなことはない、ちゃんと日清間の条約に書かれてある。私はその条約を読んだことがある」と、断固としてがんばる。

こうなると、私としてもひっこむわけにもいかず、いろいろと日中関係を説明した。先生は、「その条約文を持ってくる」といって、図書室にいったが、まもなく手ぶらで帰ってきて、「今、その条約集は見当らない」とのことである。私はそこでだまり、次の話題に移った。あの先生は、どうしてこんな突拍子もない感ちがいをされて、それをあくまで固執されたのか、そのわけを想像することさえ私にはできないが、この話を逆にして、私たち日本人の外国史とくにアジア、アフリカの諸国の歴史についての知識にも、あるいはこの種のとんでもないまちがった先入感にわざわざいされていることも、あるいはしないだろうか。

ポー・デルタの田舎町

飯沼 二郎

パドヴァ大学のレキ教授と、ベロナ大学のバンゼッティ教授のご配慮で、北イタリアの農村を泊りあることになった。まず、その手はじめに、七月四日から五日間、ポー河口、デルタ地帯のアリアノ・ポリジーネという小さな田舎町に入りこむことになった。

パドヴァからロヴィゴまでは、汽車で約四〇分。ロヴィゴ駅には、町長さんがみずから出迎えにきて下さった。四五、六歳の堂々たる美丈夫である。氏の自動車で二、三〇分も走ると、ポー河の堤防ぞいの道になる。やがて、一望の平野。ほどなくアリアノ・ポリジーネに入る。

町長さんは英語ができない。私もイタリア語が全然できない。そこで、会話はほとんど要領をえないのだが、どうやら、「まずホテルに行く」といつているらしい。こんな小さな田舎町にもホテルがあるのかなあ、と思っていると、あながい、立派で清潔なホテルに着いた。荷物を置いて、すぐ、町長さんと近くの農家に行く。一八歳ぐらいの、少し英語のできる青年がいて、厩舎や畠に案内してくれる。乳牛は三〇頭ぐらい。畠には麦、トウモロコシ、砂糖大根、ブドウ、アルファルファ。黄色くなった麦畠に、

赤いケシの花が点々。青年は「これはイタリアの中での共産党だ。自分はイタリア共和国に忠実だ。幸い、イタリアには共産党員は少ない」と熱心にいう。共産主義国と直接に隣つづきの国民のむき出しの敵愾心をみるおもしろいである。そばでみていた青年の父親が、「俺はファシストだ」と陽気に笑う。

ホテルに帰って昼食。五合ぐらい白ブドウ酒が入ったガラスのフラスコ瓶が、テーブルの上にデンとすえてあり、いくらでも飲みほうだいである。ラベルもなく、この土地の「地酒」のようである。うまい。「生ハムとメロン」とピフテキと野菜を注文する。二人のボーイが、献身的にサービスしてくれる。おそらく、日本人をみるのは、はじめてなのだろう。料理もなかなかうまく、安心する。

四時に町長さんの自動車が迎えにきて、再び先ほどの農家に行く。英語のできる青年を乗せて、ポー河の河口ちかくまで車を走らせる。橋を渡る。一一〇メートルある由。さすがはイタリア第一の大河である。そのあたりは広々とした水田。一枚が四、五ヘクタールもある。しかし、成長はあまりよくない。田植はしないで、すべて直播だという。播種後、二回、除草剤をまくだけであとは何もしない。収量はヘクタールあたり五、六トン（粳）だという。

河からポンプで水を揚げているのを見る。「あれは『チャイナ』だ」という。おそらく、中国の竜骨車に由来するものであろう。しかし、そのような旧式のものはいわめて少なく、大部分は近代的な灌漑施設である。水はコンクリートの溝を流れ、道路では地下にもぐり、再び地上に出る。

ホテルに帰ると、六時を過ぎていた。食堂でみんなにコカコーラを馳走する。英語のできるおっさんが私たちのところによってきて、私に、「さっきラジオで、お前の国の内閣総理大臣が代ったといっていた」という。その名前は福田か田中かときくと、そこまでは覚えていないという。みんなと別れて、ひとり、部屋に戻り、シャワーをあびて、ベットに横になる。暑かった一日。空には雲ひとつなかった。

日没は八時半ぐらい。だから、夕食は九時になる。このころから、人びとが、ホテルの前の歩道におかれたイスに集ってくる。自動車でやってくる人もある。これらの人びとのすべてが、ホテルから何か飲物をとるわけではなく、ホテルのがわも何もいらない。昼間の暑さにくらべて、夜の涼しさは心よい。一〇時半ごろ、ねむくなって、部屋にひきあげる。ベットに入るが、窓のすぐ下で話している人びとの声がうるさくて、なかなか寝つかれない。しかも、夜がふけるにつれて、しだいに人声が高くなるようだ。ようやく人びとが引き上げていったのは、一時ちかくだったろうか。ホテルのすぐ近くに教会があるらしく、三〇分ごとに鐘をならしている。

インドネシア便り

日 比 野 丈 夫

(前略) 一九六五年のいわゆる九・三〇事件から、翌年にか

て行なわれた激しい華僑迫害ののち、かれらがどのような環境におかれているのか。われわれには余り確実な情報が知らされていないので、これを見て廻るのが一つの大きな目的でした。七月の末からスマトラに渡ってメダン、パレンバン、ジャワではまずジャカルタを中心に、パンドン、ジョクジャカルタ、スマラン、西部ではスラバヤ附近の各地、バリ島、それからボルネオにきて今ポンチアナクにいますが、昨日は北の国境近くまで行ってきました。

一口に華僑とはいっても地方によってまちまちで、ジャワ島ではインドネシア的な統制が非常によく行きたっているのに対し、スマトラでは華僑がわりあい自守的に中華体制を維持しております。例えば、ジャカルタでは華僑の私立学校がほとんどないのに、スマトラのメダンには二〇ばかりもあるといったぐあいです。しかし、一般的にかれらが九・三〇事件いらいの傷手から立ち直ったのは、ようやくこの二、三年來のことのように思われます。あのときのインドネシア人による華僑虐殺、掠奪、破壊は実に大変なもので、そのものすごさを至るところで聞かされました。それが今日では復興されて、以前にまさる繁栄を示しているところが少なくないのには不思議なほどです。ボルネオではまだそのいたましい痕跡が残っているのを、あちこちで見かけました。

華僑の仏教や道教の寺院もいったんは破壊されたに違いないのですが、それが美しく修復されて、多くの参詣人を集めています。信教の自由というスカルノの政策が受けつがれているので、このような状態が公認されているのです。八月八日は旧暦の六月三十日、スマランの三宝公のお祭りでした。これを見ることが今回

の旅行の一つの目的だったのですが、九・三〇事件で中止されていたのが、八年ぶりで復活を許されたわけです。三宝公とはいうまでもなく明の鄭和のことで、スマランの市外、五、六キロのところ三宝洞というその祠があり、市内の大覚寺という寺院から、そこまで盛大な行列が行なわれるのです。早朝まだ暗いうちから大変な人出で、ジャカルタからは観光団がバスをつらねてつめかけ、宿という宿はみなシンガポール、ホンコン、タイワンな

《おくりもの》

藤枝晃教授にスタニスラス・ジュリアン賞

フランス学士院文芸アカデミー Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Institut de France は、今年度のスタニスラス・ジュリアン賞を藤枝教授の『文字の文化史』に対して授与することに決定し、その授賞式が、さる七月十三日、いわゆるカトルズ・ジュイエの前夜祭のうちに、関西日仏学館でとり行なわれた。教授は羽織袴に威儀を正して、この賞を受けられた。

今回の受賞の対象となった『文字の文化史』については、すでに本誌四号に上山春平氏が紹介批評され、藤枝教授でなくでは出来ないユニークな「前人未踏の」作品であることは周知のところであるから、ここではもはや触れる必要はあるまい。むしろ、この賞のことを少し紹介しておこう。

どからきた旅客でいっぱいでした。インドネシアの華僑社会が、それ自身で復興しだした象徴のような気がしました。

しかし、はたしてこのような状態がどこまで続くのか、何となぐ不安にならざるをえません。米、日の中国接近という現実と結びついて、東南アジア諸国の焦躁を身近かに感じています。

八月三十一日 ポンチアナクにて

スタニスラス・ジュリアン Stanislas Julien (1797—1878) は十九世紀中葉におけるヨーロッパ最大のシナ学者であって、フランスにおいて真に学問的なシナ学の伝統を確立し、フランスのシナ学をヨーロッパ世界に冠絶せしめた大立物である。この賞は、かれが遺贈した基金にもとづいて設置され、毎年、中国に関する最高の業績に対して与えられる。欧米ではこの分野においてもっとも権威ある賞となっているものである。

本所ときわめて関係の深い故羽田亨博士、さらに神田喜一郎・吉川幸次郎両博士について、今回この権威ある賞を藤枝教授が受けられたことは、単に教授個人の荣誉であるだけでなく、本所の声価をますます全世界に高めるものとして、まことに慶賀にたえない。

(川勝義雄)

書いたもの一覧

一九七二年四月～九月

(五十音順、●印は単行本)



・会 田 雄 次

外国の歴史と社会に対する理解と誤解

季刊歴史と文学 二号 六月

女性のための警句

婦人画報 二〇二二月号

◎日本人の探求(編著)

日本能率協会 六月

◎織田信長『政治的人間の系譜』四巻(共著) 思索社 七月

・飛 鳥 井 雅 道

自由の灯火(『日本人の百年』五巻)

五月

反戦・非戦の系譜(『日本人の百年』八巻)

八月

日清・日露戦争とナショナリズム 国文学・解釈と鑑賞 八月号

・荒 井 健

◎文学論集『中国文明選』一三巻(共著)

朝日新聞社 五月

囲城

京都新聞 四月

西遊記

同 七月

日語漢字詞弁異手冊
四庫全書総目提要
近思録

同 七月
同 八月
同 九月

・井 上 清

釣魚諸島の歴史と領有権(再論)

中国研究所「中国研究月報」 六月号

◎尖閣列島―史的究明

現代評論社 九月

・飯 沼 二 郎

新しい日本農業の創造(三)

現代農業 四月号

連合赤軍事件を考える

共同通信系各紙 四月上旬

高松塚と在日朝鮮人

朝日新聞 四月一五日

大型機械化の歴史的検討

農業と経済 四月号

上農は草を見ずして草をとる(『日本思想大系』二二巻、月報)

岩波書店 四月

反戦市民運動全国懇談会

齋州島の小さなお墓

本との出会い

市民運動の実践と論理(編)

農学榮えて農業滅ぶ

批判と非難

「ほびつと」事件について

書評・加用信文著『日本農法論』農業と経済 三八巻八号

キリスト者の平和運動について(対談・高橋三郎)

・上山 春平

◎神々の体系

・梅 棹 忠 夫

女性と仕事と文明(1)「セックス・フリーの時代」(座談会)

神々の分業——日本人の宗教と信仰心について——(座談会)

探検教育論(座談会)『朝日講座・探検と冒険』四巻

探検と言語の習得(対談)『朝日講座・探検と冒険』四巻

ベトナム通信 五〇号 四月

ベトナム通信 五一号 五月

毎日新聞 五月二四日

毛沢東思想研究 六月号

読売新聞 六月二二日

ベトナム通信 五二号 六月

同 五三号 七月

信徒の友 八月号

中央公論社 七月

事務と経営 4月号

ENERGY 三二号 四月

朝日新聞社 四月

朝日新聞社 四月

続・知的生産の技術——第一回「知的生産の技術」の反響——

図書 五月号

女性と仕事と文明(2)「ホモ」と「レス」の文化を破壊せ

よ(座談会)

日本の文化構造——中央と地方「北方新時代・二一世紀の東

北」 河北新報 五月四日

◎日本文化の構造(論集・日本文化)一卷(共編)

探検組織論(座談会)『朝日講座・探検と冒険』三巻 講談社 五月

続・知的生産の技術——第二回「しらべる」ということま

たは文献探索—— 朝日新聞社 五月

女性と仕事と文明(3)母と子の間の「カルチャー」を愛 図書 六月号

えよ(座談会)

フンメルとムール 事務と経営 六月号

探検とは何か(座談会)『朝日講座・探検講座』七巻 人文 五号 六月

文筆生活への起点——知性と私——(知性アイデア・セン

ターの十五年) 朝日新聞社 六月

◎日本文化と世界(論集・日本文化)二巻(共編)

知性アイデア・セン 知性アイデア・セン

タの十五年) 講談社 六月

とにかく家族みんなで旅に出よう——体験手記「わが家の家

族旅行」選評—— 暮しの設計 七月号

休めノ日本人 醒めよノサラリーマン (対談) 現代 七月号

女性と仕事と文明 (4) 性と生産性 事務と経営 七月号

続・知的生産の技術 第三回・ひく本——リファレンス・

ブックスについて 図書 七月号

◎朝日講座・探検と冒険 二巻 (編集) 朝日新聞社 七月

東南アジアの国と国民 (討論会) (『朝日講座・探検と冒険』

二巻) 朝日新聞社 七月

インド亜大陸の人びとと文化 (討論会) (『朝日講座・探検

と冒険』二巻) 朝日新聞社 七月

ヒマラヤとその周辺 (討論会) (『朝日講座・探検と冒険』

二巻) 朝日新聞社 七月

探検人間論 (座談会) (『朝日講座・探検と冒険』二巻) 朝日新聞社 七月

◎日本文化の表情 (『論集・日本文化』三巻) (共編) 講談社 七月

女性と仕事と文化 (5) 消費と女性 事務と経営 七月号

ご機嫌の老城主——わたしの城 週刊朝日 八月一日

◎朝日講座・探検と冒険 五巻 (編集) 朝日新聞社 八月

ヨーロッパ探検の意味 (討論会) (『朝日講座・探検と冒険』

五巻) 朝日新聞社 八月

ヨーロッパの文化 (討論会) (『朝日講座・探検と冒険』五巻) 朝日新聞社 八月

ヨーロッパの国と国民 (討論会) (『朝日講座・探検と冒険』

五巻) 朝日新聞社 八月

ヨーロッパの言語 (討論会) (『朝日講座・探検と冒険』五巻) 朝日新聞社 八月

探検経営論 (座談会) (『朝日講座・探検と冒険』五巻) 朝日新聞社 八月

女性と仕事と文明 (6) 職業的機會 (座談会) 朝日新聞社 八月

人類の未来 (対談) (桑原武夫対話集『日本の眼・外国の

眼』) 事務と経営 九月号

・内井 惣 七 中央公論社 九月

婦納論理学と確率 哲学研究 五二三号 七月

・愛 宕 元 中国文獻よりみた高松塚古墳壁画の器物 仏教芸術 八七号 八月

・河野 健 二 現代史への視座 中央公論社 七月

ブルードンの社会主義 世界 八月号

論壇時評 朝日新聞 八月二八・二九日

同 同 九月二八・二九日

・熊倉 功夫

日記のなかの中世と近世（共著）

日本美術工芸

四〇三号、四〇八号 四月～九月

近代茶道の改革運動——田中仙樵と大日本茶道学会——

芸能史研究 三七号 四月

●山口仁生の記録（共著）

私家版 七月

・小南 一郎

洛陽伽藍記

共同通信社系各紙 五月上旬

神仙伝

同 六月上旬

論語

同 八月下旬

今古奇観

同 九月下旬

・阪上 孝

ブルードンにおける所有・国家・革命

季刊社会思想 二卷二号 七月

・多田道太郎

●日本文化論集（共編）全三巻

講談社 五月

●しぐさの日本文化

筑摩書房 七月

市民意識の変容と新聞編集の将来

新聞研究 八月

・田中 謙二

朱子語類・外任篇訳注（四）

東洋史研究 三二巻一号 六月

●校定本・元典章・刑部（共著）第二冊

京大人文研 七月

・竹内 成明

●戦後思想への視角——主体と言語

筑摩書房 四月

一九八四年の国語

朝日新聞 七月一九日

書評・吉本隆明対談集『どこに思想の根拠をおくか』

週刊読書人 七月二四日

戦争体験の思想化

読売新聞 八月八日

書評・ジョージ・ウドコック著『オーウェルの全体像』

エコノミスト 九月二六日

・永田 英正

書評・大庭脩著『親魏倭王』

読売新聞 五月一日

漢代の結婚の生態（『長沙漢墓の奇跡』）

週刊朝日 九月

・狭間 直樹

林覚民『与妻書』

共同通信系各紙 五月

方志敏『可愛的中国』

同 六月

書評・北山康夫著『中国革命の歴史的研究』

ミネルヴァ通信 五二号 六月

毛沢東『老三篇』

共同通信系各紙 七月

雷鋒『日記』

同 八月

劉師復と『民声』——民国初年における中国の無政府主義——

思想 八月号

黄育梗『破邪詳弁』

共同通信系各紙 九月

書評・河地重蔵著『毛沢東と現代中国——社会主義経済建
設の課題——』 アジア経済 九月号

・林 巳奈夫

西周時代玉人像の衣服と頭飾 史林 五五卷二号 六月

・林屋辰三郎

近世の展開・序説(京都市編『京都の歴史』五卷) 四月

いち枚の肖像・平重盛(『月刊百科』一一五) 平凡社 四月

古代の但馬 但馬史研究 三号 四月

高松塚古墳・古代解明の原点(座談会・樋口隆康、上山春
平) 読売新聞 四月

一世紀の歴史 朝日新聞 五月

民謡と歴史(『日本の歌謡』一卷) 中央公論社 五月

日本人の信仰(座談会・加藤秀俊、米山俊直ほか) エナアジ 三二二号 五月

◎日本の「道」——その源流と展開(共編) 講談社 六月

物語と能(京都新能パンフレット) 放送朝日 六月

観劇の世界から(対談・藤岡喜愛) 文芸春秋 七月

日本人はどこから来たか(対談・司馬遼太郎) 文芸春秋 七月

天下人の道——安土・京都・大坂(『文学の旅』一一卷) 千趣会 七月

日本人はいかに形成されたか(対談・司馬遼太郎)

都市のなかの祭り 文芸春秋 八月

散所 上方芸能 二五号 八月

京都よもやま話 週刊アルファ 一〇五号 九月

京都の歳事史(コミュニティ、一〇九) 京耳報 三八号 九月

・樋口 謹一 京都新聞 一〇九月

ミニコミと現代 月刊エコノミスト 六月号

書評・福田敏一著『近代政治原理成立史序説』 季刊社会思想 二卷二号 七月

子どもは自然の弟子(ルソー 保育の手帖 八月号

ルソー『社会契約論』(荒川幾男編『社会思想の名著』) 九月

・福永 光司

老荘思想と現代 創造の世界 六号 四月

現代文明に警告する老荘の哲学 月刊エコノミスト 九月号

古代中国人の死後の世界 週間朝日 増刊号 九月

老荘と仏教 東書国語通信 三号 九月

『浄土論註総索引』はしがき 東本願寺真宗数学研究所 九月

・藤枝 晃

私の『日本精神』 図書 二七四号 六月

・船越昭生

鄂君啓節について 東方学報京都 四三冊 三月

在華イエズス会土作成地図と鎖国時代の地図——「坤輿万国全図」「康熙図」の評価・従来の研究をめぐって

人文地理 二四卷三号 四月

・牧田諦亮

陳毅副総理の意見 朝日アジアレビュー 一〇号 六月

徴定上人年譜（古経挿索録 附録） 東山学園 八月

・三浦国雄

朱子の哲学雜感 世界思想 一九七二年秋季号

・三宅一郎

BMD（汎用統計プログラム・パッケージ）利用のために（4）

京都大学大型計算機センター広報 五卷五号 五月

書評・井出嘉憲著『地方自治の政治学』

エコノミスト 六月二〇日

データ処理のためのプログラム——BMD——

医学のあゆみ 八二卷五号 七月

京都市における市民意識（一） 法学論叢 九一卷三号 九月

・山下正男

アメリカとヨーロッパで見た宗教

◎クワイン著『論理学の哲学』（翻訳）

理想 九月号
培風館 六月

・山田慶児

“Science and Technology in Contemporary China”, in

China, The Peasant Revolution (ed. by Ray Wylie), London.

・吉田光邦

道具——聖性への熱望

◎立ちすくむ現代

東洋的機械観

世界のかたち イラン

書架の一本

花のいのち

七〇年代のTV（対談）

万国博と勸業博（『日本人の二〇〇年』三卷）

◎アラブ著『ロウソクの科学』（翻訳）

◎Persian Pottery

言語表現のロゴスとパトス

ユートピアとしての庭

芸術生活 四月

ダイヤモンド社 四月

グラフィケーション 四月

アプローチ 四月

MGジャーナル 四月

きようと 四月

オール関西 四月

講談社 五月

Weatherhill Co. 五月

新聞研究 五月

京せんすい 五月

沖縄海洋博の証言(座談会)

建築評論

五月

地方産業のリーダー(『日本人の一〇〇年』四卷)

五月

つづれ織

京都

六月

日本の色

東洋インキニュース

六月

問われる科学技術

自動車とその世界

六月

日本人の価値観

宣伝会議

六月

京の近代化と伝統工芸(『素顔の京都』)

六月

水と人と(『日本の文様・水』)

六月

重工業時代の幕開け(『日本人の一〇〇年』六卷)

七月

◎ペルシア裂

有終堂

七月

祇園祭(座談会)

オール関西

七月

反逆の呪術としての性

流動

八月

わが著書を語る

出版ニュース

八月

クラフトに期待するもの

京都クラフトニュース

八月

高松塚の星象四神図について

仏教芸術

八月

鉄の町八幡の誕生(『日本人の一〇〇年』七卷)

八月

高松塚随想

歴史読本

八月

高松塚二、三(『高松塚古墳』所収)

オール関西

九月

日本改造論と祇園会

週刊朝日増刊

九月

死者のための造型

JIDA

九月

民具とインダストリアル・デザイン

くらしのこよみ

九月

機械と人間

日本及日本人

九月

美的感覚の復権

軍需工業の発展と労働者(『日本人の一〇〇年』八卷)

九月

・ 渡 部 徹

部落問題の本質と解放運動の理論(増訂版)

堺市教育委員会同和教育室

五月

労働戦線の統一・再編問題

日本労働協会雑誌

六月号

石橋湛山全集の完結を迎えて(対談・長幸男)

東洋経済・書窓

五・六月合併号

部落問題学習講座・解放運動の歴史・解放理論の諸問題

社会タイムス

六月二五日・七月九日・七月一六日

田中内閣時代と野党の責任(対談・福島徳寿郎)

労働調査時報

八月号

労働調査時報

八月号